慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	臼杵図書館蔵「福沢先生遺籍」解題初稿
Sub Title	Preliminary notes on the "Fukuzawa Collection" in Usuki library
Author	佐藤, 一郎(Satoh, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1979
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.2/3 (1979. 6) ,p.81(191)- 92(202)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19790600-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

臼杵図書館蔵「福沢先生遺籍」解題初稿

佐藤一郎

一

臼杵図書館架蔵の「福沢先生遺籍」（同図書館命名）については、古く富田正文氏の次の記述がある。「この採集旅行の終末に臼杵図書館に行き、そこで福沢先生の父百助の旧蔵書を見せて貰ったが、石河幹明著『福沢諭吉伝』第一巻三二頁所掲の書目八十冊の外に、更に四部十四冊の追加すべきものを見出したから、その書名をこゝに記しておく。

刊謬正俗　一冊（刊本）
蒟廊偶筆　一冊（写本）
江邨銷夏録　六冊（刊本）
古文観止　六冊（刊本）

なお同館では『読礼通考』三十二冊の刊本をも、百助旧蔵書といっているが、これには福沢の蔵書印もないのでしばらく疑を存しておく」（富田正文「中津資料採訪の収穫」（『福沢研究』第七号所収　昭和二十九年五月）

『福翁自伝』の読者であるならば、もとより安政三年九月に福沢諭吉が中津時代に師事した漢学（亀井系）の師白石照山を臼杵に訪ねて、蔵書を臼杵藩に買取ってもらい十五両の金を作ったいきさつは熟知しているはずである。しかしながら、遺籍の内容については今日までほとんど吟味されることなく経過し、富田氏の示唆するところも後継者によって新たな展開を見たとはいえない状況であった。

それが最近になって、昭和五十三年八月一日に河北展生・佐志伝両氏が同図書館を調査し、従来の目録では不備で

あった点を相当程度正されると共に、蔵書について気付いた点があれば指摘するように筆者に求められたのである。しかしながら急にはなんらの御返辞もできないまま数ケ月を経過したが、丸山信氏より大阪・中津・臼杵および長州の調査研究旅行に誘われ、臼杵図書館を同年の十二月二十七日に訪ねて多少の収穫があった。

解題のうち書誌的な記述は、佐志伝氏を通じて提供された河北・佐志両氏の調査を基礎とし、臼杵図書館の目録を参照して著者名・刊年等を数個所増補したものである。内容についての解題はもっぱら筆者の責任において行った。

二

福沢一号　陳明卿　四書備考　一四冊

（内　元帙四冊　亨帙三冊　利帙四冊　貞帙三冊）

福沢氏蔵書　印あり　27×17cm　唐本　登録二〇五四号

臼杵出身の塾員荘田平五郎旧蔵書の混入か。『改訂内閣文庫漢籍分類目録』に、『四書備考』二八巻首一巻　明　陳仁錫　明刊」が記録されている。流布の範囲がかなり限られており稀覯本に属する。陳仁錫・字は明卿、天啓二年進士。官は編集を以て辞職した。

福沢二号　万斯大　万氏経学五書　乾隆戊寅序　弁志堂一二冊

（内　上帙六冊　下帙六冊）　福沢氏　印あり　26.8×17.4cm

唐本　登録二〇五三号

見返しに黄梨洲先生点定　万充宗先生経学五書とあり。斯大（一六三三～一六八三）は清の大儒。浙江省鄞県の人。字は充宗。その師は明末清初の陽明学系の大儒黄宗羲。斯大は経学を治めてもっとも春秋三礼に精通す。『四庫全書目録提要』に『儀礼商』『学礼質疑』『礼記偶箋』『周官弁非』『学春秋随筆』を載せるが、以上を内容とすることは見返し細目によっても明かである。

福沢三号　沈掞庭　易経遵註行文便蒙　乾隆乙未年季春　涵春堂　四冊　24.5×15.5　唐本　登録二〇五五号

「掞庭自序」に「夫書以便蒙為主」とあり。主要な書目

に便蒙を冠するもの数種が記載されているが、本書はまだ見当らない。

福沢四号　乾隆帝　御撰資治通鑑綱目三編　乾隆十一年四月
六冊　24.4×15.3　唐本　登録二〇五六号

『資治通鑑』は北宋の司馬光、『資治通鑑綱目』は南宋の朱子の編になり、以降朱子学派のテキスト。わが国では『綱目』は荻生徂徠など古学派の攻撃により一時衰える。朱子学者尾藤二洲、柴野栗山らの努力で再び流行し幕末に及ぶ。本書の「御撰」は乾隆帝を指す。

福沢五号　徐乾学　読礼通考　康熙三十五年序　冠山堂　三二冊（内一帙八冊　二帙八冊　三帙八冊　四帙八冊）25×17
唐本　登録二一四三号

福沢の蔵書印なし。第二冊二十五丁表頭書欄外

大正　年　月　日
荘田平五郎氏
寄贈

の印あり

見返しに徐健菴先生編輯とある。万斯大の弟が斯同であり『読礼通考』の事実上の著者。斯同はほとんど独力で『明史稿』五百巻を完成した。徐乾学、号は健菴、清朝考証学の祖顧炎武の甥にあたり、康熙帝に仕えて官は刑部尚書に至った。代作者が斯同であるために名著の誉れたかく、喪礼に特に詳しい。碩学朱彝尊の序を冠する。

福沢六号　昭明太子　硃批文選　海録軒　一二冊　28.1×17.4
唐本

福沢氏蔵書

印あり　登録二一四四号

見返しに、重刻昭明文選李善註　何義門先生評点　葉涌峰参訂とあり、さらに重刻文選序の終りに乾隆三十七年歳次壬辰二月八日　長洲　葉樹藩　題於海録軒　の文字が見える。梁（六朝）の昭明太子編の『文選』は三十巻、唐の李善が高宗の顕慶三年に『文選李善注』六十巻を奉る。開元六年以降の呂延済らの『五臣注』、また李善注系に『五臣注』を加えた『六臣注文選』との関係など考察を要する。なお江戸期の刊本としては上杉景勝の重臣直江兼続の『六臣注文選』が慶長十二年に刊行され、直江版として尊

重されている。

福沢七号　沈起鳳　諧鐸　乾隆壬子仲冬　六冊　17.3×11　福沢家蔵

の印あり　唐本　登録三七九七号

清の沈起鳳の著。奇事異談をもっぱら載せ、諷刺の意を含むという。著者は乾隆三十三年の挙人。起鳳の父は文壇の大御所袁枚と親交があった。書物の完成は乾隆五十六年（一七九一）であるから、完成後ほどなく福沢家の蔵書中に加わったことになる。謹厳な家風の同家異色の書。

福沢八号　袁枚　随園詩話　九冊　17.5×10.8　消　福沢家蔵

唐本　登録三七九五号

見返しに重刊随園詩話とある。また本文の冒頭に倉山居士著と入っている。袁枚は清の詩人で古文作家。風流人・食通として『随園食単』も有名である。江戸中期以降のわが国の漢詩人で、愛好する人が多い。頼山陽・広瀬淡窓などがそれであるが、帆足万里は清詩一般を好まなかった。乾隆の性霊派を代表し在野の傾向が強い。その詩話は、とくに彼自身の交際範囲の人の作品を重視する。また女弟子を養成し、道学的傾向が沈徳潜の格調派に比べ、はるかに薄い。主として文筆業によって南京郊外小倉山に宏壮な邸宅随園を営み、袁随園で世に知られる。

福沢九号　陳三辰　人生必読書　嘉慶二年序　尚友堂　四冊　17.3×11.2　福沢家蔵

唐本　登録三七九六号

蕭山とも名乗る。古典より教訓を抜粋し、分類整理した書物。

福沢十号　三浦梅園　敢語　明和丁亥冬十月　訓点本　一冊　26.5×18.1　松菊猶存　福沢氏蔵書　福沢氏

印あり　登録二九六六号

見返しに「梅園三語　敢語」とある。

三浦晋（すすむ）、字は安貞、梅園はその号、享保八年（一七二三）豊後杵築郊外の富永村に生れ、寛政元年（一七八九）数えの六十七歳で没す。『敢語』は梅園の思想的

著述の一で、『玄語』『贅語』『敢語』を梅園三語と呼ぶ。中津藩儒藤田敬所に従学し、杵築の天文学者で後に大坂で洋学者となる麻田剛立（「大阪に洋学の基礎を置いたのは豊後出身の麻田剛立である」『緒方洪庵と適塾』適塾記念会　昭和五十二年四月）と親交があった。『敢語』一巻の完成は宝暦十三年、四十一歳のときで四年を費し、換稿四度に及んだという。『敢語』自序は四年後の明和四年の執筆である。その主著『玄語』が自然、宇宙についての哲学的探究であるのに対し、『敢語』は政治論、人生観に重点がある。

なお帆足万里の師、脇愚山は梅園の弟子である。名を長之、別号を蘭室という。豊後速見郡小浦の人。（一七六四～一八一四）

また『臼杵史談』に「臼杵藩学史」を連載し、臼杵時代の白石照山について研究した久多羅木儀一郎は、『脇蘭室全集』（昭和五年七月刊）の編者である。

福沢一二号　高士奇　江邨銷夏録　寛政十二年庚申十一月　和刻本　六冊　26.5×17.5　消氏　福沢蔵書　登録二九六四号

見返しに杏堂浜先生校定と入っている。巻一末尾の明の詩人唐寅の絶句「唐子畏西湖釣艇図」三十年来一釣竿・幾曽叉手揖高官・茅柴白酒蘆花被・明月西湖何処灘」を踏えた絶句「江湖尽日把長竿、不向人間做好官、蘆花被底遊僊夢、分付瞿塘十二灘」の書込みがある。『徳川時代出版者出版物集覧』に、「江邨銷夏録　三巻（清）高士奇　大坂　山口又一郎　寛政十二年出版」とある。高士奇、字は澹人、号は江村、浙江省銭塘の人。聖祖に抜擢され官は礼部侍郎に至る。康熙四十三年没。

頼山陽は『江邨銷夏録』を読んでその鑑識眼を評価し、『高江邨集鈔』六巻を彦根の小野田氏赤松園より刊行している。

福沢一二号　伊藤長胤　刊謬正俗　寛延元年冬十一月　青竹楼　一冊　四六倍　登録二九六五号

安原貞平の跋文あり。長胤（一六七〇～一七三六）は京

都の仁斎の長子。名は長胤、字は原蔵、号は東涯。『徳川時代出版者出版物集覧』に「刊謬正俗　伊藤長胤　寛延一江都　青竹楼」とある。福沢百助は大坂時代東涯の学問をもっとも重んじた。

『福翁自伝』によれば、同家には「『易経集註』十三冊に伊藤東涯先生が自筆でこまごまと書入れをしたみごとなものがある」と見えるが、東涯自身の筆に成るかどうか異論があり、書入本の他人の手による写本と思われる。

福沢一三号　建部清庵　民間備荒録　明和八年辛卯七月　訓点本
二冊　26×18　福沢氏蔵書　福沢氏　登録三七九四号

奥州一関侍医　清庵建部由正元策甫著　豊州佐伯侍医伊藤維則　奥州一関医官　衣関敬貫　校梓とあり。『徳川時代出版者出版物集覧』に「民間備荒録　建部由正　文政七　大坂　秋田屋太右ェ門」と別の版本を記録するから医者で洋学者を兼る清庵の著は、ひろく有識者の間で読まれたものと思われる。清庵には他に『和蘭医事問答』（建部清庵問・杉田玄白答）などの著がある。

福沢一四号　洪自誠　菜根譚　文政八年　層山堂　二冊　和刻本
22.8×15.1　福沢氏蔵書　消　福沢氏　登録番号欠

見返しに「此書ハ明ノ洪自誠ト云ル人ノ著述ニシテ其学道徳ニ本ツキ能人情世態ノ理ニクハシク其論スル言毫末ヲ分チ細微ニワタリ実ニ世ニ処スルノ良方ヲトケリ上巻ハ仕官中ニ人ニマジハリ事ニ応ズルノ道ヲ云下巻ハ退静閑居ノ楽ヲイヘリ……」とあり。人生訓・金言の書物として、今日に至るまでひろく行なわれている。

福沢一五号　帆足万里　修辞通　一冊　写本
24×17.8　福沢氏蔵書　消　登録三八〇九号

巻末に「文化十二年乙亥写之」とあり「青柳堂」名入罫紙。

豊後日出の大儒、帆足万里（一七七八～一八五二）の漢

詩文を作る上での実践的な理論書。万里の家系は『井楼纂聞』巻之三に自ら記するように豊後土着の名家。少納言清原正高を遠祖とし、大友氏ののち佐伯の毛利侯二万石・日出の木下侯二万五千石に仕え木下侯の重臣の家に生れた。『続群書類従』系図部第一七三巻には「清原氏系図　清原氏系図（別本・五篇）豊後清原氏系図　石島系図」を収め、この豊後清原氏の後裔かと思われる。

この『修辞通』は、「復文起稿」の教えに特色がある。初学者はまず叙事を学び、ついで議論の文に入るべきであると説く。和漢の詩文の大家を批評して、筆鋒きわめて鋭い。その師脇長之、号は愚山が序文（「題修辞通」庚午仲冬）を寄せている。万里、字は鵬卿、また愚亭で知られる。

福沢一六号　亀井元鳳　読弁道　一冊　写本　27.3×19

福沢氏蔵書　福沢氏消　登録二九七〇号

本文内容を補足する書入れあり。

筑前の徂徠学者南冥の子。昭陽、字は元鳳の著。中津の白石照山の塾では写本を用い、そのため塾生が苦労したというがこの書物も写本。筆写の時期が確定すれば百助ではなく、諭吉との関係も考えられないこともない。「照山の学統は復古派にして、始めは程朱の説を信じ、旁ら古学を研修したりしが、東都より帰藩の後其の学友なる同藩士西周哲の亀井昭陽の門に入り、学を卒へて帰郷するに及び照山其の齎らす所の註疏を精読し、深く感歎し案を拍って曰く、之れ予が知音なりと、爾来全く旧学を捨てて専ら亀井父子の註疏に基き古註を参酌して経義を講説せり。故に学生は皆写本を以て教科書に充てたれば大に学習上の困難を感じ居たりとぞ」（山崎有信著『豊前人物志』白石照山の項）

ここで批判の対象となった『弁道』は荻生徂徠の著。頼維勤氏は岩波の『日本思想大系』本『徂徠学派』の解説で「いま『読弁道』を見るに、その内容は、批判といっても所謂る高等批判ではなく、あくまで徂徠の立場に立っての批判である」と述べている。またその漢詩文の表現においても古文辞派の主張を継承しているのであるから、同一学

派内での批判であり側面的な展開を計るものといえよう。

福沢一七号　亀井元鳳　烽山日記　上　一冊　写本　27×19

福沢氏蔵書　消

登録三八〇九号

巻末に「文政元戊寅謄写　卑室蔵書」とあり。また本文内容を補足する書入れあり。斯道文庫は元鳳・昭陽の自筆稿本『空山日記』二十八巻および『烽山日記』の写本（書入本）を架蔵する。『亀井南冥昭陽全集』第七巻（葦書房昭和五十四年二月刊）所収の『烽山日記』の解説で荒木見悟氏は次のように述べる。

「『烽山日記』は、文化六年（昭陽三十七歳）より翌文化七年にかけて、烽山輪番に勤務した時の体験を、日記体で記したものである。烽山とは、本書冒頭にも記されているように、外国艦艇の近海接近を警戒して、長崎鎮台より肥前・筑前・筑後・豊前の諸藩に命じ、各藩内の適当な山上に烽火台を設け、烽火の合図によって、危急の伝達を計らせた、その山々のことである」

「烽山日記は、上中下三巻より成るが、当初は前二巻だけがまとめられ、下巻はあとから追加されたものの如く…絶え間なく推敲を加え続けていたことを物語っている。亀井家伝来の『万暦家内年鑑』によれば、文政四年の欄に、「七月、烽山後記清写、凡三巻全備」という昭陽の書き込みがあるから、この年一応完稿したのであろう。勤務を終って十二年目にあたる」

以上の記述から判断すると、福沢本『烽山日記』は全巻成立以前に筆写された早い時期の写本といえるのである。

福沢一八号　帆足万里　肄業余稿　一冊　写本　27×19.2

登録三八〇九号

巻末に「文化丙子之春写之　卑室蔵書」とあり。

福沢氏蔵書

また、表紙四に竹の絵の書入れあり。

業を肄（肄）うの意味で、門人たちの多方面の疑問に答えた万里の最初の著述であり、中国学（江戸漢学を含む）、社会、自然科学などにその範囲が及び、のちにそれぞれ独立した著述となる各分野に関する豊かな知識を示してい

る。文化五年（一八〇八）に完成し、師の愚山の跋文がある。

なお、福沢諭吉の父百助は万里が信頼を寄せた弟子であり、『帆足先生文集』巻の三に「与二福沢生一」を、『西崦先生余稿』上に「福沢生恵レ酒」と題する絶句一首を載せている。百助に「奉寄愚亭先生」「奉愚亭先生書」がある。

福沢一九号　〔王象晉〕佩文斎広羣芳譜　巻四十七　一冊　写本　23.4×17　福沢氏蔵書　消　登録三八〇九号

福沢本は端本で巻四十七のみ存する。『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』上はその三の「蔬果花木之属」に分類し、「明　王象晉原本　清　劉灝奉敕刪補刊本　同治七年　江左書林蔵版」本を載せる。

福沢二〇号　犖牧仲　筠廊偶筆　一冊　写本　24.3×16.7　福沢氏蔵書　消　福沢氏消　登録二九六一号

清の犖牧仲の著。著者自身の見聞や批評を随筆風に記している。「大約在裴松之三国志注、酈道元水経注、伯仲間、非余子能彷彿也」の巻頭の文章は、よくその内容を語るものであろう。

福沢二一号　呉楚材　呉調侯　古文観止　嘉慶乙亥新鐫　博古堂　25.9×16.5　福沢氏蔵書　消　登録二九六一号

通俗的な古文学習書。康熙の刊本にはじまる。周秦より明末までの古文二百二十二篇を収める。

以上が臼杵図書館「福沢先生遺籍」登載の書物である。以下の一本は河北・佐志両氏の調査による追加分である。

七美門一四号　広沢釣徒（書）　篆体異同歌　享保乙巳孟春　三冊　27.5×18.6　京師　柳枝軒　茨城多左エ門　江戸　小川彦九郎版行　福沢氏蔵書　消　の印あり　登録番号欠。『福沢諭吉伝』一

巻には載せられている。『国書総目録』第五巻　八三九頁には、「『篆体異同歌』二巻付録一巻三冊(類)書道(著)細井知慎(広沢)・付録　池永栄春箋注　(成)享保一〇序＊付録は篆髄(ママ)附録」と見えている。

三

蔵書の評価について。

福沢諭吉の厳父百助が中津藩著名の学者であった事実は『福翁自伝』および『福沢全集緒言』(明治三十年)に見える高谷竜洲の「在昔尊厳福沢百助先生が豊前中津藩の文壇を専らにして敢て争ふ者なかりしは拙者の親しく見る所あり」の証言や、解題中の帆足万里の詩文、中津の浄安寺に現存する書家中村寿山の墓側の銘文によっても窺われる。また当時著名な丹後田辺藩儒野田笛浦とは、親交があったという。

福沢家の旧蔵書の構成は、十八世紀十九世紀の豊前・豊後の学問の方向と深く結びついており、仁斎学・亀井父子・広瀬淡窓・白石照山を通じた徂徠学、窮理の学では梅園・万理学、詩では、淡窓の好んだ清詩の影響などが指摘できる。また本格的な学問態度の結果として、和刻本ではなく、唐本が圧倒的に多い。

この地域には朱子学・陽明学の影響が比較的薄く、蘭学の受容の上に実学への関心がいち早く現れ、また総じて小藩ながら佐伯の毛利高標が江戸時代の代表的蔵書家に数えられているように好学の諸侯が多く、日田の咸宜園をはじめ全国的に知られた私塾が発達するなど、特色が著しい。

福沢家の蔵書の主要部分は百助の代に成立したものと推定されるが、当時の上士を含む武士階級の蔵書の水準をはるかに超え、ひとかどの学者の域に達していたことは臼杵関係の図書のみから推測しても明白である。

わずかに十三石二人扶持の世禄の家に、これだけ内容的に高い漢籍が架蔵されていた事実は、福沢家の好学の風を雄弁に今日に伝えると共に、徳川後期の学風を考えるうえでの一つの貴重な資料である。

中央の学界の動きは瀬戸内航路により主として大坂を経て、海外の動向は長崎や博多を通じて比較的はやく内外の

情報の入る豊前・豊後は、当時の学問の先進地帯としての様相が濃厚である。この蔵書内容も、伝統的な中国古典学の忠実な継承としての註疏の学や停滞的な朱子学を主とせず、学問の最新の情報や文壇の動きに敏感であったことを物語っているのである。

なお、徳川末期の双豊の地の学問の系譜については、機会を得て詳細に考察したいと念願している。

以上をもって、今回の解題は終ることとする。最後に面倒な調査になにかと御高配を賜った臼杵図書館当局と佐野武夫氏、中津関係史跡の案内の労をとられた嶋通夫氏、大阪の徳川末期の史跡について御案内くださった梅溪昇氏に深甚なる謝意を表したい。

（昭和五十四年四月八日夜稿了）

〔追記〕

伊藤長胤（東涯）の『刊謬正俗』の内容が『日本儒林叢書』所収本により詳しく判明したので、補足することにする。また、東涯と大坂との関係についても蛇足を加えておきたい。

まず「刊謬正俗叙」には、元禄庚午之歳春二月　京兆伊藤長胤自序

とある。この書はその後も子孫の手で刊行され、「……夫是書、先君雖レ不レ欲レ流二伝于世一、然既刊刻多歴二年所一、今而廃レ之亦可レ惜也。為加二校訂一正二版面一、且従二旧本一。附二刻作文真訣一、謹題二其由於巻首一爾。

明和己丑歳　伊藤善韶謹序

とある。目次は「重刻刊謬正俗本」（明和刊）では第一年号類　第二　輿地類　第三　官爵類　第四　姓族類　第五　名字類　第六　別号類　第七　称呼類　第八　自述類　第九　印章類　第十　簽押類　第十一　碑碣類　第十二　族属類　第十三　編集類　第十四　訓詁類

附　作文真訣　訳文法式　読書題目　抄書門類　右附録四条或名二文訣一別行

であり、読書と作文の上で心得るべき個条を詳論して有益である。例えば自述類に、「姓下称字、亦係二他人之称一、今俗書称呼、皆姓下称レ字、伝襲相仍、不レ可二遽変一也。至二於文章一、不レ可レ称。古文有下自二書欧陽永叔・司馬君実一者上

乎。単録レ字則可、必不レ可レ連ニ於姓下一。」というような具体的な心得が書きつらねてある。

百助については『福翁自伝』に、「その書き残したものなどを見れば真実正銘の漢儒で、ことに堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心屋漏に愧じずということばかり心がけたものと思われるから、その遺風はおのずから私の家には存していなければならぬ」とあるが、伴忠康著『適塾をめぐる人々〜蘭学の流れ〜』（創元社）の第五章はもっぱら大坂の漢学塾、懐徳堂と絲漢堂の記述にあて、これらの学塾に東涯の影響が強かったことに言及している。

大坂の中津藩倉屋敷在勤時代、当時の大坂の学風に百助がどのように反応したか、百助の自筆稿本の漢詩文集二種を精査する必要がある。また一方、豊前・豊後の学問と福沢家の学問との関係をも考察する必要がある。この解題初稿が不充分ながら福沢家の学風を考える上での礎石の一つになることを念願すると共に、大坂・双豊における化政・幕末の新しい儒学の方向を探るささやかな意図をも秘めるものであることを付言しておきたい。

（四月二十六日）